

氏 名（国籍）	アハマド モハメド ナバウィ ハサブ エルナビィ（エジプト）		
学 位 の 種 類	博 士（国際政治経済学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4830 号		
学位授与年月日	平成 20 年 7 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	Higher Education and Politics in Malaysia (マレーシアにおける高等教育と政治)		
主 査	筑波大学教授	Dr phil. habil.（歴史学）	クラインシュミット、ハラルド
副 査	筑波大学教授	博士（文学）	前 川 啓 治
副 査	筑波大学教授	Ph. D.（人類学）	木 下 太 志
副 査	筑波大学准教授	博士（文学）	関 根 久 雄
副 査	筑波大学准教授	Ph. D.（政治学・国際関係）	キンボ、ネイサン ギルバート

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、マレーシアの今日に至るまでの高等教育の展開に対して、イギリスによる植民地統治がいかに国内および国際政治的影響を及ぼしてきたかを調査したものである。とりわけ、様々な水準の高等教育の提供と、それを国民が享受する際の公平性・不公平性が、多民族社会であるマレーシアの社会的統一性にどのような作用をもたらしてきたのかという側面を分析している。またその帰結として、マレーシアの政治体制の安定性に与える影響も検討している。

マレーシアの多民族社会は、イギリスによる植民地統治時代の移民政策がもたらしたものである。イギリス政府は、中国とインドからマレー半島への大規模な自発的あるいは強制的な人口移動を発生させ、この土地に特定の人口混成を生み出したことにのみ責任があるだけではなく、中華系、インド系、マレー系という三つの異なる社会を分断するエスニックな「ラベル」を強要した。またイギリス政府は、同国式のカリキュラムにもとづきながら、エスニックを分け隔てる教育機関を設けた。そのような形でイギリス政府は、マレー半島の住民による公共空間の形成を阻害し、現在のマレーシアに植民地的な依存状況を留めさせた。

植民地統治の時代を通して、イギリス政府は農業や基礎的な医療教育といった分野に高等教育を限定し、それさえも設備が貧弱なわずかばかりの機関にのみ認めていた。こうした数少ない機関はシンガポールなど都市部に設けられ、主に中国出身者の裕福な家庭の子供が優先された。その一方で、地方のマレー人や低所得のインド移民には高等教育機関を利用する機会がほとんど与えられなかった。高等教育機関は社会的統一性の熟成や公共空間の形成に資することなく、社会の分断状況を固定してしまったのである。なお 1996 年、新たな高等教育機関の創設と既存の教育機関の支援を目的としマレーシア政府は、民間の投資家を国内外から招致することを決定した。長年実施されてきたマレー人への積極的差別是正措置がその年に廃止されている。この教育の民営化政策には反対の声が強く、2007 年 11 月には暴力的な動乱に発展するほどに民衆を動揺させた。

本論文は叙述の部分において、19 世紀後半から 20 世紀後半におけるマラヤとマレーシアの高等教育機関

の歴史を辿っている。分析の部分においては、1996年から2006年までのマレーシアの高等教育制度に関して、教育の質、公平性、社会的統一性といった概念を軸に調査がなされている。本論文は、イギリスの植民地統治が現在に至るまでマレーシアの高等教育に影響を及ぼし、健全な公共空間の形成と発展を著しく制限していると結論づけている。

本論文の第一章は、マレーシアの人口構造および政治的側面を歴史的に検討している。次いで、高等教育機関の研究を政治学に関連づける必要性を述べつつ、教育の社会史の方法論を国際政治学的な分析と結びつけている。また本章では、教育の質、公平性、社会的統一性といった分析のための鍵概念が説明されているとともに、公共空間の理論が検討されている。

第二章は、教育分野および政治学分野における先行研究を考察することで、政治学者のなかで教育、とりわけ高等教育への関心が欠けていることを示している。この欠落は逆説的である。なぜなら、高等教育機関はその社会において社会的統一性を提供するもの、したがって公共空間を立ち上げ維持するものと伝統的に理解されているからである。

第三章は、1957年までのイギリス領マラヤにおける高等教育機関の歴史を、教育の社会史という観点から叙述する。一次資料にもとづき、マレーシアの高等教育を管理する立場にあった英国の統治者を特徴づけていたステレオタイプを分析している。この分析は、英国の統治者が本国のカリキュラムを現地に課し、意図的にその高等教育を制約していることを示している。被統治者は圧倒的に農業と漁業に従事するとの認識が統治者側にはあった。したがって、農業と漁業分野における効率性の追求こそが、高等教育機関に課された任務であった。

第四章は、医療教育の歴史に着目し、医療教育を提供する唯一の高等機関が、貧弱でかつ利用が制約されていたことを示している。この分野で活躍する十分な規模の人材を輩出するにあたり、英国の統治者の存在により、高等機関は非効率でしかありえなかった。この高等機関の目的は、医療研究を促進するものではなく、基礎的な医療分野の知識の普及にあった。

第五章は、英国の植民地統治に関する二つの報告書を分析し、その知見を示す。この報告書は、イギリス領マラヤの高等教育の改善を目指したものである。この報告書は、当時認識されていた教育の障害を除去することを試みて、批判的観点から学術的に書かれたものであった。しかし、植民地政策のなかで埋め込まれたステレオタイプがそこには吹き込まれており、現地人について統治者がもっている否定的なイメージを再確認するものであった。したがってこの報告書が状況を改革する可能性は極めて限られていた。

第六章は、ポスト植民地時代について考察を進め、植民地主義の遺産が押し付ける歴史的連続性について叙述している。新しく独立したマラヤ連邦の統治機構は、植民地の遺産による限界を乗り越える機会がなかったという証左がここに示される。共産主義の反政府勢力と対抗するという困難な任務を背負うとともに、1965年には連邦からのシンガポールの切り離しという国家機構上の問題を抱えていたからである。

第七章は、1969年5月13日の「人種暴動」の影響を分析している。地方のマレー人学生に教育機会を提供する積極的差別是正措置の実施と高等教育機関の拡大について検討されている。こうした施策は、新経済政策（NEP）に組み込まれ、1969年の暴動の後に推進され、1996年まで効力をもっていた。その結果、高等教育予算は増加し、教育機会の公平性も促されたが、マレーシア人の教育水準や社会的統一性は改善されなかった。

第八章は、1996年における民営化計画の導入によって積極的差別是正措置が廃止された帰結を分析している。この民営化計画は、高等教育機関に充てられる国家予算の欠如から導かれたものである。ここでは、高等教育における民営化の概念枠組みがマレーシアの事例分析に応用されている。

第九章は、いくつかの選択された私立の高等教育機関の調査をとりあげている。これらは、マレーシア政府による高等教育の主要な提供者である。ここでは、上の機関が及ぼしたとみられるマレーシアの社会的統

一性に対する否定的な影響を示している。

第十章は、公立大学に応用された民営化スキームを吟味する。ここでは、政府はその管理下に置き続ける機関に対しても、民営化の論理を適用していることが明らかにされている。民営化とはあくまでも装いに過ぎないのであり、高等教育機関に対する政府の監督を弱めることなく、その責任を政府から非政府主体へ移譲することがそこで意図されている。

第十一章は、結論として、本論文の知見をまとめ、21世紀のマレーシアにおける高等教育の歴史の帰結を述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、植民地時代から現在に至るまでの期間を対象とし、一次資料を精査しつつ、マラヤとマレーシアにおける高等教育の歴史について首尾一貫した批判的な検討を行った最初の試みである。本論文は、イギリス国立公文書館、マレーシアの国立古文書館、国立図書館、マレーシア文部省の資料館、マレーシア大学の資料館等の一次資料を吟味し、今日のマレーシアの高等教育制度についても新たにデータを収集し、それを活用している。

さらに本論文は、ハーバマス派の公共空間という概念を用い、マレーシアにおいて公共空間が生まれなかった理由を探り出すことに成功している。この分析により、同分野における既存の研究が踏み込めなかった側面が明らかになり、公共空間に関する一般理論の補強という貢献がなされた。また本論文は、公共空間の形成の成否が単に国内の政治社会的な要因に帰すのではなく、ハーバマスが述べるように、ヨーロッパの植民地支配を中心とする国際環境に求められることを明らかにしている。基本的に西欧社会の分析概念であった公共空間の概念を非西欧社会に適用しようとする試みであるが、そもそも非西欧社会において公共空間が形成されなかったこと自体が西欧社会と非西欧社会との歴史的関係性に起因したものであることを示している。

植民地統治の遺産は多くの途上国に今日も残されており、それゆえに、本論文の成果は単なる一事例研究にとどまるものではない。本研究は、国際政治と国内政治の側面から教育の社会史を明らかにした先駆的な研究として高く評価できる。

よって、著者は博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。